歴史探訪

第6回

古代にもあった関ヶ原の戦い
「壬申の乱」はこうして起きた
（第2編）

前回のあらすじ

中大兄皇子（後の天智天皇）と中臣鎌足は、当時最大の権力を持ちわが世の春を謳歌していた蘇我蝦夷（そがのえみし）、入鹿（いるか）親子の蘇我氏本家を滅亡させた。蘇我の分家、縁者を巧みに味方に引き入れ同族間のねたみをうまく利用したのである（乙巳（いっし）の変）。そして、中大兄皇子は次の標的として蘇我氏そのものを滅亡させることを目論んだ。蘇我本家の滅亡に協力した分家たちを巧妙に分裂させ、天皇家の力を復活させようとしたのである。

また、皇族でも蘇我氏に繋がっている皇子等は容赦なく死に追いやり、叛逆の頭目に担ぎ上げられそうな皇族を内々に抹殺していった。後々の火種を断つためである。こうして、中大兄皇子は権力を徐々に掌握していった。

外交においては、実弟大海人皇子は大国・唐と戦うことのリスクを主張して中大兄皇子の対百済政策について反対していた。兄との政治路線の違いによって、二人の仲は疎遠になっていった。中臣鎌足は二人が対立した時には、うまく二人の仲を仲裁していた。しかし、鎌足が死んだ今、奸臣というべき重臣は、自分の保身のみを考える者たちばかりで中大兄皇子の不興を恐れてすべて同調する者ばかりであった。

結果として下記のような事態を招いた。

①白村江の戦いにおいて、唐と新羅の連合軍に大敗北をした。

②国家の威信の失墜だけでなく、国家財政の浪費と各豪族の疲弊を招き、豪族に対して出費を補填するどころか本土防衛のため、豪族のさらなる費用負担で山城や水城を建造する宣旨を出すこと等により豪族や民衆の不満を買った。

③唐や新羅を敵に回し侵略を招くような事態を発生させた。（結果的に倭国（日本）が侵略されなかったのは、この時期唐国自身が北方民族北狄（ほくてき）の侵略を受けて、これに対処しなければならなくなったという幸運によるものである）

大海人の進言を取り上げておけば倭国はもっと国力、文化が進展していたにちがいない。

中大兄皇子は国政においては西暦645年「大化の改新」といわれる改革を宣旨し、倭国の国家としての国体づくりを断行した。各豪族が地域で力を握る分権国家から、天皇を中心とした中央集権国家に変革したことは中大兄皇子や中臣鎌足の素晴しい偉業である。しかし、中臣鎌足が死んだ後、内政・外交とも急激な変革に地方豪族の不満は限界に達していった。そこへ来て、天智天皇は自らの体調の異変に気づき、長子大友皇子（本来皇位継承権はない）に皇位継承させねばという焦りを感じていた。前回でも触れておいたが、当時の皇位継承の慣例は、現天皇が崩御された場合、

①現代と違ってまず、皇位継承の第1順位は崩御された天皇の兄弟である。

②その兄弟がいない場合に限り、第2順位として現天皇の長子に皇位相続権が移る。

③現天皇の子供でも、母親が身分の低い豪族の娘の出身であれば当初より皇位を継承する権利自体がない。

今回の場合は、第1位皇位継承権を持っているのは天智天皇の実弟の大海人皇子である。第2位は大津皇子、第3位は草壁皇子である。したがって、大友皇子の皇位継承権自体は存在しないのである。

これを、天智天皇は自分の権力を使って大友を天皇にしようと画策したのである。これが「壬申の乱」の遠因となった。そして日本国最高の地位をめぐる最初の真の“天下分け目”の戦いが勃発したのである。

1 天智天皇の晩年

671年天智天皇は重大な人事を発令した。

大友皇子を太政大臣に任命した。本来ならば皇太子の地位にある大海人皇子が就任すべきポストである。この時、大海人皇子はすべてのポストを解任され、まったく政務の蚊帳の外におかれたのである。

そして、大臣は天智の側近で固められた。左大臣に蘇我赤兄臣、右大臣に中臣金連、御史大夫に蘇我果安臣、巨勢人臣、紀大人臣計5人に大友の執政の補佐をさせた。しかし、地方有力豪族は、本来なら皇太子であり第一皇位継承者である大海人皇子が政務を引き継ぎ次期天皇になることが、当時は本来のルールであり血統からいっても当然と考えていた。けれども天智天皇は24歳という若年で、まったく実績もなくかつ卑母からの生まれである大友皇子に次期天皇の座を譲りたいと考えている気配があることに懸念を持っていた。なぜ、卑母から生まれた皇子に皇位継承権がないかといえば、古来では例えば大友皇子が天皇になり早世した場合、その母が天皇になることもあったからである。召使でお手つきの子が天皇になり早世した場合は、母が天皇になる可能性がある。これは有力豪族にしてみれば召使だった者の家来になることと同じである。それ自体大変な屈辱であり決して容認できるものではなく、また天皇の血統が穢れると考えられたのである。

これに比べて大海人皇子の場合は、兄である中大兄皇子と共に敵対する豪族と戦い兄を支えてきた人物である。これは全国の豪族の認めるところである。当面、天智天皇の存在のおかげで何も表立っての叛逆は起こらなかったが、やはり慣例からもまた、実戦経験、統率力等からいっても大海人皇子が次期天皇になることが適任であると大半の豪族は考えていた。しかし大友皇子が太政大臣になったのである。これは慣例を損なうこととして豪族たちは一層反発を強めていった。大海人皇子も今回の人事には大変不快感を持ったはずであり、地方有力豪族も同様な心情であったと思われる。日頃地方豪族の不満を聴き緩衝材的役割をしてきた大海人皇子である。後に叛逆を思い立ち、讃良皇女（天智天皇の娘で、大海人皇子の妻、後の持統天皇）付の女官等含めてもわずか30人程度で吉野を脱出した彼が自らの私領地である美濃に到着する一週間程の間に、合力する味方が3万人に増えたのも納得できるところである。平常時には目立たないが、「壬申の乱」のような非常時には、強兵でならした東国の兵（基本的に美濃以東は当時東国といわれていた。境目は不破の関である）は、圧倒的な力を発揮し向かうところ敵なしの情況で進軍し大勝したのであった。

大海人皇子は、中臣鎌足という英雄が居なくなった空白を、凡庸な集団でしか埋められない朝廷を哀れと思ったにちがいない。

2 吉野に隠棲

671年に入り、いろいろな手当にも関わらず天智天皇の病状はさらに悪化していった。激しい痛みは日夜、天智天皇の強靭な精神力を打ち砕いた。四六時中その看病をしたのは天智天皇の采女であった大友皇子の生母である伊賀宅子であった。十数人いる妻のなかで天皇という鎧をとった天智天皇を、辛い看病と病魔に苦しむ一人の夫として世話ができるのは彼女しかいなかったであろう。大豪族出身の妻には決してできるものではなかった。権力とは関係なく一人の人間として愛するのか、あるいはその人間が身にまとう鎧を愛するのか、このとき天智天皇は、前者である宅子を妻にした自分の洞察に間違いはなかったと思ったことであろう。最期は宅子と大友皇子だけに看取られて崩御したのである。

話は戻るが、天智天皇は大海人皇子の存在が、わが長子大友皇子にとって一番の障壁になると考えてい

た。そこで彼は大海人皇子を道連れにあの世に旅立とうと考えた。天智天皇は側近に命じて蘇我臣安麻呂を呼んだ。安麻呂は弟の大海人とも親しかった。
「安麻呂、大海人に使いして、すぐ来るように言え」
安麻呂は死の淵に立つ天智に、鋭い不気味な何かが迫っているのを感じた。しかし、それが何かまではわからなかった。すぐに安麻呂は大海人皇子の邸宅に参上した。けれども、道すがら何か不吉な胸騒ぎがしていた。
「ただちに参上するように、というご命令でございます」
大海人は天智天皇の病状を安麻呂から聞いた。そして、兄の寿命がついに尽きようとしていることを悟った。
「そんなにお悪いのか」
「はい、最近はめっきりお痩せになりほぼ寝たきりのご様子でございます」
そのとき、安麻呂は天智天皇のただならぬ切迫感を感じたことを告げた。日本書紀には『有意ひて言へ』としか書いてないが、安麻呂は十分注意してご発言くださいと言ったのである。

大海人はこのときはじめて、自分の命が危ない情況におかれていると感じた。兄は今まで政敵を次々と葬ってきた。今、自分がその対象になったであろうことはすぐに想像がついた。大海人は自分の一言で二度と宮殿から生きて戻れないであろう恐怖を覚えていた。

天智は、大海人が大友と比較して実績・人望・経験等々すべての点で優れていることは、共に戦ってきた者として一番よく知っていた。今回、一切の政務から除外した彼の境遇で、大海人が天皇即位への意思を持っていれば、必ずや自分が死んだ後、大友と対立し天下に争乱が起こるであろう。今の新羅との険悪な関係を考えると、今国内で内乱を起こしている場合ではない危機感を感じていた。天智は自分の最期の仕事として、この憂いに対して手段を選ばず解決したかった。

やがて大海人の参上が告げられ、人払いがなされた。大海人は枕元に座り、
「しばらくでございます」
とあいさつをした。天智は、
「最近は痛みがひどくてな、もうわしの寿命も長くはないだろう」（今日の眼から見れば、おそらく胃ガンであったろうと思われる。日本書紀原文では、『朕、疾甚』と記されている）
「なにを弱気なことをおっしゃっておられますか。きっとよくなられます」
「いいや、自分の身体は自分が一番わかっているつもりだ。それで、お前を呼んだのだ」
「お前に頼みがある、大海人。私はお前に譲位してから安らかに死にたい。受けてくれ」
大海人は正座したまま再拝して言った。
「私は最近病気がちで、外出は控えております。とても国政を執る器ではございません。せっかくのお言葉ですが辞退させていただきます」
と平伏したまま大海人は天智に哀願した。天智に、
「現状の国難を切り抜けられるのはお前しかおらぬと思うが、いかがか」
と問われたので、大海人は慎重に言葉を選んで言上した。
「皇位は皇后の倭媛にお授けになり、大友皇子を摂政として今まで通り諸政を行われたらいかがでしょうか」
大海人は平伏したまま言い、次のように続けた。
「私から天皇にお願いがございます。私はこれからすぐ出家して、天皇のおんために仏道に精進いたしたいと思います。どうかお許し願います」
大海人の言葉は、天智の想定外の申し出であった。
「お前はまだ出家などする歳ではなかろう」
「私は政務には向いておりません。吉野へ隠棲し病を癒したい。また、天皇のご回復をご祈願致したいと考えております。ぜひともお許しをお願い申し上げます」
天智もこうまで言われては、大海人を殺す理由がなくなってしまった。
「政務を執る意思はないのだな」

と天智は再度、意思確認をした。
「はい、まったくございません」
「では、大津京にいて大友の良き相談相手をしてくれないか。大友には学問は修得させたが歳が若く経験不足なことだけが気がかりじゃ」
と天智が言った。

「わたしがおりましては、大友皇子もおやりにくかろうと存じます。この際、一切を大友皇子にお任せになられたほうが政権は安定致しましょう」
「そうかのう」
と天智は少し考え込んでいた。
「わかった。大海人の出家の申し出を許そう」

壬申の乱 両陣営と主な戦場

大海人はすぐさま宮殿の一角にある仏殿に向かった。急いで僧が呼ばれ経が読まれる中、剃髪の儀式があわただしく執り行われた。日本書紀には『胡床に踞坐げて、鬚髪を剃徐りたまふ』と書いてある。

剃髪儀式中に天智より袈裟が届けられた。大海人はただちにその袈裟をまとい、天智に最期のあいさつに参上した。大海人は天智の刃を避けるためには、仏道をも武器にしたのである。おかげで、大海人は大芝居をうったため殺されずに宮殿を出たのである。左大臣蘇我赤兄は大海人を殺すために控えていたが、さぞかし口惜しかったことであろう。

それからの大海人の行動は素早かった。知将と言われただけの人物である。大海人は邸内にあった武器をすべて回収し宮殿に届けさせたのである。こうすれば天智の重臣も無防備の大海人を吉野へ向かう途中で襲う大義がなくなってしまうと考えたからである。

吉野へ付き従う舎人は30人程の少人数にしぼり、讃良皇女付きの女官を含めてすべて騎馬ができる者を選抜していた。大海人は舎人の村国男依を先発させて、宇治川を渡ったところに馬を用意させ飛鳥の嶋宮での宿所の準備を指示した。大海人は計画通り宇治川を渡ったところで、村国男依が用意していた馬に全員騎乗させた。大海人は法衣を脱ぎ捨て、

「本日のうちに飛鳥古京に入る」

と命令した。飛鳥古京までは90キロの距離である。休息も入れずして走り続けても6時間はかかる長い行程である。途中、近江朝の襲撃を交わすには、やむを得ないことであった。

舎人の和珥部君手を偵察として一足早く出発させた。

「突っ走るのだ」

と大声で叫び駿馬に鞭をあて自ら先頭に立って疾走した。木津川を越え、若草山を見向きもせず土ぼこりをあげて飛鳥まで駆け抜けたのである。大海人の泊まる宮殿、嶋宮離宮は蘇我馬子の墓といわれる石舞台古墳の近くにあった。

嶋宮離宮に着いたのは、日も暮れた午後7時頃と思われた。大海人もすごいがそれに付き従う舎人たちも素晴しい精鋭揃いである。歴戦の兵集団と言われていた所以が理解できる。

後に勃発する「壬申の乱」でこの美濃の兵共が将軍として、大友軍を殲滅してゆくのである。美濃は大海人の私領地であり舎人たちは直参の家来である。その舎人たちは美濃の各地豪族の頭領なのである。

飛鳥の嶋宮離宮で出迎えたのは大和の大豪族、大伴馬来田と弟の吹負であった。彼らの父は左大臣を勤めていたほどの家柄であるが、蘇我氏とそりが合わず病気と称して地元に帰っていたのである。

その時、極秘裏に大海人皇子と大伴氏、讃良皇女、村国男依、舎人たちを交え今後の連絡網や武器の調達等役割分担などあらゆる戦略の構想が話し合われたにちがいない。大海人は戦略会議をしっかり綿密に行っていた。

その後、飛鳥から吉野（およそ20キロ）に向け出発したのである。吉野への道のりは7通りの間道があり、すべて峠越えをしなければならなかった。しかし、もう追手の心配がなくなったので、ゆっくりとした旅気分であった。関戸峠、細峠、竜在峠、芋峠、壷坂峠、芦原峠、今木峠の、どのコースをとっても標高500メートル超えの山道である。ましてや1400年前である。険しい道筋であったであろう。

吉野には母である先帝の斉明天皇の別荘が宮殿としてあったと言われている。この峠のおかげで近江の朝廷が大海人の動きを掴みにくい利点もあった。その宮殿は吉野川沿いの宮滝あたりにあったと後の発掘調査で証明されている。大海人皇子が吉野に滞在した8ヶ月の間の記録はあまり残されていない。しかし、対近江朝への戦闘準備が極秘裏に行われていたことは間違いないであろう。

蜂起するからには、決して失敗は許されない。まず、当面、次のような準備が必要であろう。

①蜂起の時機の見極め

②蜂起後の吉野脱出と領国美濃までのルートの確保
③大津京に残してきた高市皇子と大津皇子の合流の計画の策定
④脱出するための馬、輿の準備
⑤戦いのため兵士、武器、食料の準備計画

これら諸々の問題を、近江朝の監視の中で悟られずに策定していかねばならない。

3 吉野脱出

671年12月3日、天智天皇は崩御した。

この知らせは、大津京に潜伏させている舎人によって直ちにもたらされた。大海人の妻の讃良皇女は、

「あなた、父がなくなったそうですよ」

「ああ、今知らせを聞いたところだ。わりと早く崩御なされたな」

讃良皇女は、父である天智に対して憎しみを持ち続けていた。それには、彼女の祖父蘇我石川麻呂が言われのない謀反の汚名を天智に着せられて殺されたこと、母である遠智姫（おちのいらつめ）も夫（天智）に父親を同じく言われのない殺され方をしたことを心に病んで死んでいったこと等々いろいろ訳があった。それゆえ父が崩御してもさほど悲しくはなかった。大津京を離れる時も、特に別れの挨拶もせず、夫である大海人に付いて来たほどである。

大海人は、吉野に滞在した8ヶ月の間、着々とかつ秘密裏に戦闘準備を進めていた。戦闘にはまず東宮としての領地である美濃まで行かねばならない。そこからがすべてのはじまりであった。吉野から不破（現在の関ヶ原付近）までは今の距離にして190キロもある。これをほぼ4日で走りきらねば、朝廷軍に途中攻撃される恐れがあった。

今のように携帯電話もない時代に、これを成し遂げるには、舎人たちが何度も繰り返し行程を行き来し、どこに何時までに着かねばならないかを調べ上げたであろう。また、吉野から不破までの間に位置する伊賀、伊勢、桑名などの豪族を味方にしておく必要もあった。これらの工作を大海人の指示の下、舎人たちは極秘裏に進めた。この8ヶ月の準備行為が近江朝に漏れれば、朝廷軍に事前に攻撃されいっさいが無に帰す賭けであった。

しかし天は大海人に味方した。大海人たちの準備行為は、相手方に漏れる事無く豪族たちはいずれも大海人の味方となって「壬申の乱」を戦い抜いたのである。

大海人の行動は早かった。天智天皇崩御の報告にかこつけて吉野の国栖（くず）及び宇陀郡（うだぐん）の豪族を集めた。そして、豪族たちと盛大な宴を開いた。大海人としては、吉野を脱出するには地元の豪族の合力が必須であった。もともと、大海人皇子には人を和ませ、権威を振りかざさないし、「この方のためならば命も惜しくない」と思わせるやさしさがあり、招かれた豪族たちは大海人皇子に心酔した。

672年5月、美濃の私領地に派遣していた朴井連雄君（えのいむらじおきみ）(注1)が血相を変えて吉野へ報告に戻ってきた。

「皇子さま、近江朝がとうとう動きましたぞ。早々に美濃へのご出立の時機かと」

雄君は早馬で不破から吉野まで一気に駆け抜けてきた。息も絶え絶え頭から全身が汗でびしょ濡れであった。讃良皇女が、

「雄君落ち着きなさい。最初からゆっくりと話をしてくれないと何のことだか分かりません。まず冷たい水でも飲みなさい」

と笑顔で椀を差し出した。雄君は恐縮して一気に飲み干して、

「あ～うまい」

と一声をあげた。大海人皇子は、

「お前はいつもそそっかしいのう」

と言って労をねぎらった。雄君は落ち着きを取り戻した。

「私が美濃に着きましたら、なにやら様子が妙なのです。東国で兵を徴発しているのです。

そこで、役人に聞いたところ、天智天皇の陵墓の造営のため民が兵として徴発されているとのことでありました」
讃良皇女が、
「別におかしいことではあるまい」
と言うと雄君は、
「たしかにその通りではございますが、皆々が武器を持っているのでございます。陵墓の造営のために兵に武器を持たせることはないと存じます」
大海人皇子は、
「たしかに陵墓の造営に武器は必要なかろう。天皇の陵墓という名目で兵を集め吉野に攻め込むつもりであろう。最近は吉野に運ぶ食料が宇治橋で止められている。雄君の言う通り天智の崩御後、この大海人の抹殺を企てているのであろう」

西暦672年6月22日、大海人は不敵な微笑みを浮かべて、
「この日のために伊賀、伊勢、美濃の舎人を地元に帰し、決起に備えさせていたのだ。村国連男依（注2）と和珥部君手（注3）と置始兎（注4）を呼べ」
3名はすぐに参上した。大海人は3名に対して、
「やっと挙兵の時機がきた。すぐさま、わしの私領地の湯沐邑まで駆けよ。そして、美濃の長官多品治と連携して兵を集めると同時にすみやかに不破の関を塞げ」
（当時は不破の関以東が東国と言われていた）
不破の関は東国へ向かう唯一の関であり、ここと鈴鹿関を抑えれば東西の分断が可能となる。近江朝の命令も東国には届かなくなるのである。そして、大海人は、
「男依よ。明日早朝にもわしは美濃に向けて吉野を出発する。今まで綿密に打ち合わせた通り、伊賀、伊勢、桑名の豪族に予定通り兵を率いて合流するように伝えよ。よいな!」
「はは～。この男依、皇子のため命を賭けて任務を全ういたします。では失礼致します」
と言って、すぐに馬上の人になった。
また次に、大分君恵尺（注5）、黄書造大伴（注6）、逢臣志摩（注7）が呼ばれた。
「おまえたちは、飛鳥の高坂王の下へ行って駅鈴（注8）を貰ってまいれ」
黄書造大伴が、
「しかし、高坂王は近江朝の役人であります。大海人様が馬をお使いとなると、こちらの動きが近江朝に漏れる可能性がございます」
大海人は、
「そのときは黄書、おまえのみが駅鈴を貰えなかった結果を知らせに戻れ。大分はその足ですぐさま大津京に残してきた高市皇子と大津皇子のところへ向かい、二人をすぐ大津から脱出させよ。そして、積殖の山口で合流するようにとわしからの伝言だと言い、そちが道案内をして連れてまいれ」
吉野宮から積殖の山口までは80キロ離れており、大津京から積殖の山口までは55キロ離れている。この二つの行程をとる者たちを同時間に合流させるのは奇跡的なことである。この8ヶ月間、大分は双方の出発時間、進行速度等を幾度も試行していた。1400年ほど前に時間の無駄なくこの合流を成功させたのは驚異としか言いようない。少しでもどちらかが遅れれば、高坂王から連絡を受けた近江朝の追手に襲われること必定である。ここは一刻を争う賭けに出たのである。
大海人は黄書が一人で帰ってきたら、報告を受けるまでもなく駅鈴を断られたものと判断していた。そして大分と同様、逢臣には飛鳥の大伴連馬来田、吹負のもとに走り、蜂起せよと伝えるように指示した。こう素早く指示し終えると、大海人皇子は釣竿を持ってのんびり川釣りに出かけたのである。讃良皇女が、
「あなた、そんなことをしていらっしゃってよろしいのですか。今は今後の戦略を考えねばならない時なのに、わたしは心配でじっとしていられません」
「心配するな。俺は小心者の高坂王の出方を見たいだけだ。先が読める者なら駅鈴を渡すであろうが、ヤツは

近江朝の役人である。バカならば必ず近江朝にお伺いを立てるであろう。各地に出発させた舎人たちのための時間かせぎにもなるというものよ。ワハハハハ。讃良よ。出立まで子供や女官たちをよく休ませてくれ。出立後は不破まであまり休めぬからな」
「はい、わかりました」
聡明な彼女はこれで全容を理解した。そのうち、黄書が独りで還ってきた。ここからの大海人の行動は早かった。黄書の報告を聞く前に全員を集めた。
「よく聞いてくれ。これより不破に向けて出立する。安心しろ。伊賀、伊勢、桑名すべて味方にしてある。ただ、近江朝の追手も来るかもしれない。ゆっくりしておれない。さあ、出立じゃ」
大海人たちは舎人と讃良皇女と子どもたち、女官を含めても30人足らずである。追手に攻められたら万事休すである。

大海人皇子一行が甘羅邑（かんら）（現在の奈良県宇陀市）あたりに差し掛かったとき、大伴朴本連大国（おおともものもとのむらじおおくに）が屈強な猟師20人ほど連れて大海人を迎えてくれた。大変心強くもあった。伊賀・伊勢・桑名と進軍するにつれて続々と地元の豪族が合力してきた。

一方、大津京では高坂王より大海人皇子が決起したとの連絡を受けて浮足立っていた。連絡遅れを非難したり、重臣の蘇我赤兄等がここまで放置していたからだと、重臣同士で互いの責任のなすりあいがはじまった。まったく情けない限りである。紀大人が、
「大海人皇子どのは今、伊賀あたりでござろう。素早く追捕軍を伊賀峠に送らねばなるまい」
大友皇子は、
「皆のもの何を恐れておる。彼らはまだ少人数のはずじゃ。それよりまず全国の豪族に対し兵の動員を掛けよ」
蘇我赤兄は、
「さすが、大友皇子さまは仰せになることが違いますな」
と言って、この非常時においてもイエスマンぶりは丸出しであった。まったく危機感に乏しい奸臣である。ここで、朝廷軍の追捕軍を出していたら、大海人皇子は確実に仕留められていたであろう。

大海人皇子は、鈴鹿の関を通り過ぎたところで、命令を下した。
「三宅連石床（みやけむらじいしとこ）、お前は徹底してここを守れ。鈴鹿関と不破関を抑えれば、近江朝の伝令は東国へは届くまい。そうすれば東国の兵はわが軍のものになるであろう」
また、大海人に朗報が届いた。
「もうすぐ、大分君恵尺（おおきだのきみえさか）の先導で予定通り高市皇子と大津皇子が、ご到着なさるそうでございます」
大海人は、
「それは目出たい。これで、安心して不破に行けるというもの。ワハハハハ!」

大海人皇子は6月26日には桑名郡家（ぐんけ）(注9)の手前の朝明郡家に到着した。このとき、一騎の馬が疾走してきた。その大男は村国男依であった。
「皇子さま、男依、ただいま戻りました」
「おぉ、男依か。よくぞ無事で戻った。よかった、よかった」
と大海人皇子はねぎらった。
「美濃において募兵したところ、たちどころに3千の兵が集まりました。そして、その者たちを率いて不破に布陣し、我らの手によって不破関を完全に手中に治めました」
大海人は、
「よくぞやってくれた。これで、東国の兵（つわもの）はわが軍として働いてくれよう」
大海人皇子は朝明郡（あさけぐんけ）家で今後の作戦会議を開いた。大海人は不破関、鈴鹿関を抑えたことで、「壬申の乱」の勝利を確信したに違いない。戦う前から勝負の行方などわからないだろうと思うが、歴戦の知将として戦いの経験の豊富さという財産が成せるわざなのであろう。戦いには戦略というものがあり、どんな戦いにも勝つポイントというものがある。そのポイントを考えることは、歴史を今に生かす醍醐味と言えるかもしれない。

また、よい事があった。約束通り尾張宿禰大隅（おわりのすくねおおすみ）が2万の兵を引き連れて、大海人に味方として桑名にやってきた。尾張宿禰大隅は、桑名、尾張、三河を治める大豪族である。これで、大海人軍は3万という大軍団となり兵力上は朝廷軍を上回る勢いであった。

それに比べ、大友軍は西国に動員の宣旨を出したものの、天智天皇の頃から唐・新羅の戦いで疲弊していたことに加え、大友皇子を正統な皇位継承者と認めない豪族が出陣を拒んできた。やむなく、近畿地方の小豪族に強制的に動員をかけた。このありさまが、戦いの士気に大きく影響を与えたのも当然であった。

大海人皇子は高市皇子を全軍の総司令官に任じた。高市皇子はすっと立ち上がって、豪族たちの前で宣言した。

「我々には神のご加護がある。朝廷軍が東で攻撃してきても天地の神々の霊で吹き飛ばしてくれるわ。皆のもの、近江朝を倒して天下のご政道を正そうではないか。私は大王に代わって指揮をとる。よろしくたのむ」

高らかに宣言したことにより士気は一層高揚した。

大海人軍の将軍たちは、大海人皇子をすでに【大王（おおきみ）】と呼んでいた。高市皇子は3万の兵を引き連れて不破に移動した。高市皇子は最前線に近い野上（現在の関ヶ原、南宮大社の西2キロ）に本陣を構えた。

一方、桑名郡家に入った大海人の妻讃良皇女は、このところの強行軍で体調を崩し臥せっていた。大海人は讃良皇女とまだ幼い草壁皇子（くさかべみこ）と忍壁皇子（おさかべみこ）をこの桑名郡家に留め置き、自らは最前線である野上へと進軍した。

672年6月27日、大海人皇子は遂に自らの直轄領である美濃国安八磨郡（あはちまぐん）に立った。3万の兵は、大海人皇子の凛々しさに足が震えるのを覚えた。大海人皇子に加勢する豪族は、信濃などから騎馬隊2千騎をはじめ、各地の豪族が加勢に集まってきた。

高市皇子は、関ヶ原の野上にて軍議をひらき朝廷軍の動き、戦略の分析を行った。

まず、最終目標は大津京にいる大友皇子を捕らえ、政権を近江朝より大海人皇子に移譲させることにある。

おそらく、近江朝軍は琵琶湖の東岸と西岸を不破に向かって攻撃を仕掛けてくるであろう。そして、すでに大海人皇子の指示によって、飛鳥で蜂起した大伴吹負（おおともの ふけい）を攻撃してくるであろう。

そこで、高市皇子は、

①近江路の主力精鋭部隊の大将軍に村国男依を指名した。その指揮下に、
書根麻呂（ふみのねまろ）・和珥部君手（わにべきみて）・胆香瓦安倍（いかごのあへ）・大分稚臣（おおきだのわかみ）・朴井雄君（えのいのおきみ）・大分恵尺（おおきだのえさか）の豪族を将軍として付けた。総勢2万の大部隊である。

②飛鳥の大伴吹負の救援軍としては、
紀阿閉麻呂（きのあへまろ）・多品治（おおのほんじ）・置始菟（おきそめのうさぎ）・三輪子首（みわのこびと）・田中足麻呂（たなかのたりまろ）の豪族を将軍とした。総勢8千を桑名、伊賀、名張経由で派遣。

③飛鳥挙兵軍としては、
大伴吹負（おおともの ふけい）・坂本財（さかもとのたから）・鴨蝦夷（かものえみし）・三輪高市麻呂（みわのたけちまろ）の豪族を将軍とし総勢1千。

④琵琶湖西回りの軍としては、
出雲狛（いずもこま）・羽田矢国（はたのやくに）の豪族を将軍とし総勢3千。

という軍の編成をした。

ここまで決戦前夜の模様を書いてきた。次回はそれぞれの戦いぶりを書いていくことになる。

（注1）美濃に住む物部氏の一族。
（注2）各務原から江南を治める地方豪族。舎人として大海人皇子に近習した。「壬申の乱」では近江路方面主力軍の大将軍として活躍した。
（注3）「壬申の乱」では近江路軍の副将として活躍した。美濃の豪族である。
（注4）信濃の豪族飛鳥の大伴吹負を騎馬軍団を率いて救援をし、劣勢だった飛鳥を取り戻した。
（注5）多氏の一族。大海人皇子の舎人をしていた。元は豊後の豪族。
（注6）渡来系氏族山城国の豪族。
（注7）どのような氏族なのかは不明である。大海人皇子の直参の家人である。
（注8）公務出張のため支給された鈴。道中駅舎で馬を借りることができた。
（注9）当時の行政区画である郡の役所。

〈参考文献〉
「壬申の乱」　倉本一宏　吉川弘文館
「壬申の乱を歩く」　倉本一宏　吉川弘文館
「敵見たる虎か吼ゆると」一部・二部　三浦　昇　実業之日本社
「日本書紀」宇治谷　孟　上下　講談社学術文庫

（2013.8.23）共立総合研究所　特命研究員　三矢 昭夫